



年祭活動仕上げの年

おちばに真実を伏せ込もう



立教百八十八年の新春
明けましておめでとうございます

大教会長 井筒梅夫

真明

発行所
天理教芦津大教会
〒546-0003
大阪市東住吉区
今川8丁目6番32号
電話 06 (6702) 1980
FAX 06 (6700) 1854
Eメール shinmei@ashitsu.or.jp
印刷所 天理時報社

謹賀新年

立教百八十八年 元旦

芦津大教会

年祭活動も三年目、仕上げの年を迎えました。中国の故事に画竜点睛という言葉があります。竜の壁画を描いていた宮廷画家が、最後に目玉を書き入れたところ、その龍が壁から飛び出して、勢いよく天に向かって昇っていった、という逸話からくる四字熟語です。つまり、物事を完成するためには、その仕上げとして大切な最後の一点を加えることがいかに大切かを意味するのであります。

ご本部から全教の今年の動きの方針として、「年頭の心定めの完遂」と、「おちば帰りの推進」が発表されました。芦津としては「一教会一名以上の修養科生を御守護頂こう」を活動目標に掲げています。更にはおちばでの伏せ込みひのきしんも実施します。このご本部の発表も芦津の目標も、すべてはおちばを目指しおちばに向かう動きであります。

今年はおちばに心を向け足を運び、おちばに真実を尽くし伏せ込み、おちばで成人させていただき、おちばでたすけていただく年であります。各々の年祭活動の成果を、おちばに持ち寄る年にさせていただきたいと思ひます。

お屋敷で私たちの成人をお見守り下さる教祖にお喜び頂けるように、おちば一条の信仰、この一点に芦津の一同が心を揃えて、一生懸命に勇んで仕上げの活動に取り組んで、画竜点睛の実を挙げさせていただきます。本年もよろしくお願いいたします。

立教百八十八年の新春を迎え

おめでとうございます

井筒ふみ子



身も心も清々しく新年
を迎え、おめでとうござ
います。

いよいよ教祖百四十年
祭まで残すところ1年と
なりました。

私たちは、10年ごとに
勤めさせていただく教祖年祭を成人への一節と捉え、旬の声を頼
りに励ませていただいておりますが、我が心を振り返ります時、
今年こそは教祖に御安心いただけるように通らせていただこうと、
心改まる年の初めでございます。

私は幼少の頃から頑丈な身体ではなかったと思いますが、有り
難いことに、2月には90回目の誕生日を迎えます。

やむほどつらいことはない

わしもこれからひのきしん

三下り目 ハツ

こうして、年齢相応ではありませんが、病み患いなく90歳を迎え
させていただくことは、ようばくとして御用を勤める時間をお与
え頂いたものと心勇みます。この勇み心を行動に移す「ひのきし
ん」を念頭に於いて本年は歩む、と心定めております。

ひとことはなしハひのきしん

七下り目 一ツ

にほひばかりをかけておく

十一下り目 二ツ

ふうふそろうてひのきしん

十一下り目 三ツ

これがだい、ちものだねや

十一下り目 四ツ

もつこになうてひのきしん

よくをわすれてひのきしん

これがだい、ちこえとなる

ひのきしんには広い意味が含まれています。

まず、にをいがけであります。一言の声掛けからにをいがけは

が始まります。言葉を尽くし、心を尽くしていくところに教えの理

が伝わっていくのであります。

また、おたすけは夫婦が家族が一つ心になって真実を尽くさな

ければなりません。そしてもつこを担う、即ち身体を使うのであ

ります。動かずして、働かずしておたすけはありません。

そして、欲を忘れる、即ち心のほこりを払わなければなりません。

ん。ほこりにまみれた心では、どんな願いも親神様に、教祖に届

かないのです。私たちは神前でおつとめを勤めるとき、先ず胸の

前で手を合わせてから、「あしきをはらうて」と心のほこりを払っ

て後、お願いをいたします。

すっかり我が心のほこりを払いながら、にをいがけ、おたすけ

に心を尽くして通らせていただきたいと念じております。

本年もよろしくお願い申し上げます。

立教百八十八年 新春に誓う

理の親、教友に励まされ



本津分教会長
梶川 芳 征

昨年は、教会長として初めて迎えた年祭活動の2年目で、私の弟がお連れした方がようぼくになりました。私自身もなんとか心定の「初席者二名」を御守護いただきたいとをいがけに励む中、成果も上がらず焦る日々。

そんな気持ちの中、本津分教会へ大教会長様にご巡教を頂いた直後、昨年少子供の小学校でPTA役員を一緒にさせてもらった保護者の方から連絡が入りました。「梶川さんは天理教の教会長をされるとお聞きしました。どんな教

えか興味が沸き、調べてみたら別席というお話があるそうですね。聞いてみたいのですが」といった内容。親神様、教祖のお働きは言うまでもありませんが、理の親に背中を押していただいたことを実感し、心が震えました。

そして2人目の初席者は、知り合って7年の30代の男性の方。子どもおぢばがえりや教会の育成行事には何度かお手伝いに来てくれるのですが、「私は天理教信者ではないので」という理由で別席を断り続けておられました。

ところが、ある芦津の部内教会長さんに祭典の神殿講話にお越しいただいたとき、その後の直会でその男性が、「芳征くん、別席聞いてみるわ」と伝えてきたのです。驚きと嬉しさと、同じ思いで年祭活動を共に歩む芦津の教友にも励

まされていることを実感し、また心が震えました。

いよいよ年祭活動も3年目。おちば、大教会への伏せ込みと「おつとめでたすけていただける」との信念をもって、教会の月次祭にたくさんの方に参拝していただけるよう声掛けに励みます。

そして年祭当日には、大勢の方と心震える日を迎えられるよう、本年も全力で通りたいと思います。

旬を逃がさずに通る



上部分教会長
大西 直 喜

いよいよ教祖百四十年祭に向かつての三年千日の歩みも仕上げの年を迎えました。

大教会より、一昨年は「動く」、昨年は「初席者二名以上の御守護を」と目標を定めていただき、それに向かって全力で取り組んできたつもりではありますが、振り返

ってみれば、昨年の初席者は目標に届かず、一昨年はもつと動けたのではないかと考えてしまいます。

教会長のお許しを戴いて半年で年祭活動が始まり、右も左も分らない中で、上級の声を頼りに教会長として、また青年会の常任委員として2年半動いていましたが、よく考えると自らの思いで動いたことや心定めというのは、数えるぐらいしかありませんでした。自分でも気付かないうちに、大教会から提示された目標や上級から言われたことだけ動けばいいと思っていたのかもしれない。

大教会やご本部の月次祭には、毎月参拝していたのですが、隅の方で神殿にも入らずに参拝していました。どこにいても、どんな服装でも同じだと考えていたのですが、あることをきっかけに、昨年の秋季大祭から大教会で教服を着て参拝させていただこうと心を定めました。

上級の会長様は、相談したときに、「心定めはいつしたっていいねん。教服着て参拝できるのは教会

「長だけやからな」と、叱られると思っていた私の予想とは違い、激励してくださいました。

また、先日参加した第3回のようばく一斉活動日で、「何かしよう、動こうと思ったそのときが旬だ」と講師の先生に教えていただき、だったので、その旬を逃さずに、年祭活動仕上の年もしっかりと通らせていただきたいと思います。

先を楽しみに



天津分教会長夫人
瀧本ふみよ

8年前に知らない土地に家族で伏せ込むことになってから、地域に溶け込むことを第一に動かしていただきました。地域の役やPTAの役を積極的に受け、徐々に知り合いも増えてきました。

そして一昨年、教祖百四十年祭の年祭活動1年目に神殿建築普請をさせていただき、人が集まる環

境も整ったので、それを機に小さいながらもこども食堂をスタートしました。

最初は子供だけの参加でしたが、回数を重ねるごとにお母さんの参加が増え、お母さん同士の輪が広がってきました。夫婦2人だけでスタートしたこども食堂も半年経って、お手伝いさせてくださいというお母さんも出てきて、私たちの目指していた賑やかな教会に少しずつ近づいてきました。

教会に足を踏み入れてくれる方の中には、身上や事情の悩みを抱えている方もいて、神様のお引き寄せだなど思うこともしばしばあります。そうした方々の相談に乗り、何とかたすかっていたいたいたいと神様をお願いさせていただくのが今の私たちの喜びです。

旬に動くといつも以上の御守護が頂戴できると聞いて、今しかないと動き出した結果、たくさんの喜びを頂戴することができました。年祭活動残り1年、教祖の50年のひながたを考えれば、すぐにようばくができるのは難しいと思います。

ですが、夫婦で教会をお預かりさせていたでいて初めての年祭活動、10年後、50年後を楽しみに今できることを精いっぱい、力の限り動かさせていただきたいと思っています。

女子青年活動を通して



女子青年委員長
井筒たつえ

昨年は女子青年活動として1年を通して月に1度、逸話篇勉強会を開催させていただきました。逸話篇の中で女子青年層へ向けられている逸話をいくつか選び、毎月1〜2つずつ担当の婦人さん方に講師をしていただき、ねりあいをしていました。

最初は、ねりあいをどのように進めていくものなのかが分からないまま探り探りでしたが、回を重ねるごとにそれぞれの感じたことをしっかりと言葉にして進めていくことができました。

同年代の仲間たちの話を聞き、自分とは違う視点から見た感じ方などに触れることができ、とても勉強になり、そういう考え方もあるんだと新しい発見にもなりました。

教祖百四十年祭に向けての年祭活動も残すところあと1年となり、この旬の時期を女子青年という限られた時間の中で過ごさせていただけのことにとってもありがたく感じています。

この年祭活動に何をしたらいいのかわからなかったり、1人だとなかなか行動できないと感じる人も多くいるかと思っています。私もその1人ですが、女子青年活動を通して少しでも前向きに、勇んだ日にできるように皆さんと一緒に歩んでいけたらと思います。



《11月月次祭 感話》

教祖と共に歩む日々

島原分教会 岩切寿代

教祖殿での一言

私は現在、天理教校本科実践課程に通い、お屋敷の伏せ込み女子青年として教理勉強やにいがけ、ご本部のひのきしんなどさまざまな御用を務めています。

授業の一環で、週に1回のにいがけがあり、夏には教会での実習、今年2月には布教の家で3週間の布教実習がありました。

そもそも私は入学するまで、にいがけに歩いたことがなく、本当に何も分からない状態でした。自分なりに一生懸命努力を重ねるのですが、同じクラスの人たちが徐々に力を付けていくのに対し、私はなかなかにいがけに対する劣等感を克服できずにいました。どうせ話を聞いてもらえない、ど

うせ断られるという考えばかりで、週に1回のにいがけの日が憂鬱になっていました。そんな状況の中、2月の布教の家兵庫寮での布教実習は刻一刻と迫っていました。今年に入って、不安と憂鬱さで気分が落ち込み、教祖殿に行っては教祖に心の内をただひたすら話して、愚痴を聞いてもらう毎日を繰り返していました。

すると、布教の家に出発する日、ご本部の朝づとめでいつものように教祖殿の最前列で教祖に向き合いい、不安な気持ちを正直に打ち明けていたら、隣に座っていたおばあさんが背中をさすりながら、「大丈夫、大丈夫、なんも心配することはいらんで。何でも喜んで通いや。結構、結構。今が一番いい時やで」と声を掛けてくださったの

です。

これはおばあちゃんの口を通して教祖が仰られていると、思わず涙が溢れました。その時、教祖は本当に私の話を聞いてくださったって、答えてくださったっているのだと、不安でいっぱいだった気持ちが一瞬でなくなりました。

にいがけに対する不安は私にとって、人生で初めて味わう大きな節だと悟り、必ず教祖が守ってくださいと信じて、「ひながた通りに道を歩ませていただきます」と、神戸に出発する日の朝に教祖にお誓い申し上げました。

喜びのループ

神戸の街で神名流しをしていると、街行く人に物珍しそうな目で見られます。最初は本当に恥ずかしかったのですが、回数を重ねるうちに自分を見てほしいとまで思えるようになりました。最終的には兵庫教務支庁から神戸三宮駅まで約1時間半の距離を歩き、三宮センター街で、思い切りよろづよ八首を歌えるようになりました。

時には罵声を浴びせられたり、たばこの煙を顔にかけられたりする日もありましたが、そんなときでもひたすら「すみません、すみません」と頭を下げて通りました。戸別訪問では一日に300件を回る日もあれば、土下座をしながら回る日もありました。ピンポンを鳴らす前にドアの前で土下座をして、「教祖よろしくお願いします」とお願いすると、不思議とその家の人が出てきてくれます。布教中はただただ教祖と念じて歩くところから始まることを学びました。

布教実習中に一日だけ、兵神大教会の天浦分教会に行きました。その時に、一日もいずんだ日はなく、毎日勇んで歩くことができるのはなぜだろうと思っていたので、ありのままの気持ちを奥様にお伺いすると、「それはね、親が喜んでるからだよ」とお答えになり、親が喜ぶと自分が勇めるということを教えていただきました。

教祖が喜んでくださったっているから、自分も自然と嬉しくなり、自分が喜ぶから教祖も喜んでくださ



るという、まさに魂の喜びのルーブになっていることに気づいたのです。年祭活動が終わったときに、教祖に「ここまで成人させてもらいました」と報告して喜んでもらえるように、一人のようばくとして、また教祖に使ってもらえる人になりたいと思います。

苦労の中にこそ

実習中に私は父とほぼ毎日連絡を取り合い、一日の成果や出来事を報告していました。今日は何百軒回った、おさづけを何回取り次いだ、初めてお供えを頂いた、などと報告すると、父は喜んで褒め

てくれます。褒めてもらえて嬉しかったので、父に報告することが次の日も頑張ろうと勇むことができる一つの原動力になりました。親が喜んでくれているということは、教祖も喜んでくださっていると思うのです。

今、私がこの道を歩ませていただけるのは、初代から私まで繋いでいただいた親々のおかげでもあります。初代がいなければ、私は信仰していません。私を代を重ねると、家の信仰の元一日や御守護のありがたさも薄れてきて、親が信仰しているから自分も何となく信仰していたと思うのです。だから節を与えて教祖の道具衆となれるよう、教えを知らない人をたすけるために心の入れ替えを促してくださるのだと思います。

布教の家では、予想をはるかに超える生活が待ち受けていました。朝ごはんはパンの耳と梅干しという日もあれば、リンゴの皮とサツマイモの煮物という日もありました。昼ごはんはもちろんなく、夜

ご飯はじゃがいもの皮が一品料理となるような、知恵と慎みの詰まったご飯を毎日いただきました。どんなに質素な料理でも一日中歩いて帰ってきたらとても美味しくて心の底からありがたいと喜びを実感しました。布教の家の台所では、

もつたない、ありがたいという声が溢れていて、ご飯を食べることができてありがたい、食べるものがあつてありがたい、そういう気持ちで通らせていただきました。

今の時代は教祖御在世の中のような不自由な時代ではありません。物が溢れかえっている世の中です。だからこそ教祖年祭に向かうこの旬は、仕切って苦労の環境に身を置くことがとても大切なことで、そこに教祖の御心を偲ぶことができるのではないかと思います。

毎日の路傍講演を通して

布教実習が終わってから毎日天理駅で路傍講演をしています。私は元の理と自教会の初代の元一日、さらには自分がたすかった話、導いてもらったことなどを話しま

す。その中でも不思議なことに元の理を話すと足を止めたり、声を掛けてくださいます。

また、天王寺駅や難波駅など天理以外の場所でも元の理を話していると、お供えを頂いたり、「頑張つてね」と食べ物や飲み物を下さったりします。本当に不思議でなりません。親神様が結構にお働きくださっているんだと、身をもつて感じる毎日です。

今では路傍講演をしないと、一日がしっくりいかなくて、頭の中が路傍講演でいっぱいになります。そのように思えるまで自分自身、少しだけ成人させていたでいるという実感と自信を持てるようになりました。

最初は本当に恥ずかしいですが、私は人に聞いてもらおうという気持ちより教祖に聞いていただくという思いで毎日務めています。

3月には1人の初席者の御守護を頂戴し、3名の方をおぢばにお連れすることができました。

また、10月20日にはフランス人旅行者3名の方とめぐり会いまし

た。ご本部夕づとめの時にその方方の横に座ると、3人とも私のおつとめを見ながら、見よう見まねで手を振ってくださいました。話を聞くと、「日本に旅行に来て、先ほど関西空港からまっすぐ天理に来た」とのことでした。「どんな教えですか」と聞かれたので、いろいろとお話しし、「上下関係はあるの?」と尋ねられたので、「天理教は親子の関係です」と答えると、それに感動されて、「もっと話を聞かせてほしい」と興味を示されました。そこで私は別席を勧めたのですが、旅行の日程があるので今回は無理だけど、必ずまた3人で天理に帰ってくると言って、連絡先を交換してその日は終わりました。

この出会いは、教祖が引き寄せてくださったのだと思うと同時に、別席も大切ですが、それよりも教祖の教えが世界中に広がればいいなと心の底から思いました。

三年千日は普段でできない苦勞をするために与えてくださっていると感じます。また仕切ることによ

って見えてくる世界があり、成人するための大事な時間だと思えます。苦勞を味わうことがひながたをたどることに繋がり、苦勞の中で親神様の御守護、教祖の親心を強く感じるができます。ひながたの一端を味わい、苦勞が種になり、一粒万倍になると考えると、何か一つだけでも教祖に喜んでいただけることをせずにはいられないという思いになります。人様を思う気持ちがおたすけに繋がり、人のたすかりや幸せを願うことも立派なおたすけです。おたすけ、それはただひたすら教祖にお喜びいただけることを続けることだと思っています。人が見ていなくても、親神様は見てくださっていると信じて、一日に何か一つでも意識して人のために、また教祖に喜んでいただけることを一生懸命頑張りたいと思います。徳とは人の前にあるのではなく、人の見ていない陰にあるということとを肝に銘じて、仕上げる年の御用に勇まらせていただきたいと存じます。

走りぬいた会長のバトンを受けて

鳥栖分教会 加藤 仁

身上の知らせを受けて

私は今年の春に教会長の理のお許しを戴きました。その少し前の3月1日、前会長は肺がんの身上が悪化し身上をお返ししました。ここからは、私が会長になる前のことをお話しさせていただきますので、前会長のことを会長としてお話をさせていただきます。

会長の身上が分かったのは今から4年前の2月、私が大教会で青年として伏せ込んだときでした。「今日、呼吸器の検査で肺がんが見つかりました。18日に脳の検査をし、2カ月の検査治療が始まります。2月、3月は妻におちば帰りをお願いする予定です」とLINEで連絡がありました。

1週間後、MRI検査の結果や今後の処置などが送られてきまし

た。画像には左肺の上部に大人の拳ほどの白い影、半分から下の方は影で覆われていて、赤ペンで上部の影に肺がん、下半分の影には胸水と書かれていました。また簡条書きで、左肺がん、ステージ4、多発転移、数週で命に関わる状況となるなど書いてあり、想像を超えた悪い結果に衝撃を受けました。

おつとめとおさづけのおかげで

その後、手術は順調に進み、予定より早く退院することができました。翌月には大教会長様がおたすけに来てくださいました。数日後、会長から、「おかげさまで11日に月次祭を勤めさせてもらいました」と喜んだ様子のLINEが届きました。17日には、検査の結果、適合する抗がん剤があると分かり、

観察のために撮ったレントゲンでは、左肺の上部の影が子供の拳ほどに小さくなっていました。また目立った副作用もなく、抗がん剤の効果も良好で、10日後には退院し、今後は通院で様子を見る事ができるとのことでした。

多くの方々のお願いごとめとおさづけのおかげで、抗がん剤が見つかり効能が現れ、副作用に苦しむこともなく闘病の最中であつても御守護を頂かれていますんだと思いました。4月には会長夫婦でお礼参拝を兼ねて、ご本部の月次祭におちば帰りをされ、会長の姿にただただありがたいと感じました。

その後も経過は良好で、この抗がん剤は丸2年の効果があり、影もみるみる小さくなっていきました。その後、最初の抗がん剤が効かなくなると2種類目、また効かなくなると3種類目と、効果が期待できるものから順に抗がん剤治療が進みました。

その間、私自身はがんが分かった年の11月に結婚し、翌年9月に

は第1子を御守護いただき、さらに翌年の7月には青年勤めを終え、妻と一緒に鳥栖分教会に伏せ込み始めました。半年後には第2子の長男が生まれ、子供2人とも会長に可愛がってもらいました。

3種類目の抗がん剤は、明らかに副作用が現れてきました。髪が白くなって抜け落ち、口の中が赤くただれ、右の横腹にも痛みを訴えるようになりました。それでも動きは以前と変わらず、会長は庭の剪定をしたり、ご本部の月次祭には鳥栖から下道でおちば帰りをしていました。

会長の一言を通して

闘病生活も2年半が過ぎたある日、会長が「今年の6月に年祭を勤めさせてもらおうと思う」と言いました。鳥栖の三代会長である前会長の二十年祭、三代会長夫人の十年祭、二代会長の五十年祭と二代会長夫人の三十年祭をまとめて執り行うというものです。親戚や信者さんとも相談をして、併せて勤めることになりました。

年祭の準備を通して、月々の月次祭とは違った鳥栖分教会の受け入れの方法を教えてくださいました。もしかすると会長自身、この年祭が自分にとっての最後の年祭になるかもしれない、と感じていたのかもしれない。

この年祭の前の月から4種類目の抗がん剤に切り替わり、この時から食がどんどん細くなっていきました。年祭の忙しさに加え、年祭に來た人には心配をさせない配慮をしていたように横で見えて思いました。

年祭は6月の月次祭の後に執り行い、60名以上の参拝者で賑わいました。しかし、この年祭を境に、会長の病状はどんどん悪くなっていきました。4種類目の抗がん剤はあまり効かず、診察を受けると、胸水が左肺の4分の3ぐらいまで溜まっており、入院して酸素吸入をしながら数日に分けて胸水を抜くことになりました。

この時、会長は今月はおちば帰りができないと、「年祭のお礼もあるから、代わりに教会の代表として

て大教会とご本部の月次祭の参拝に行ってくれ」と私に御用を託しました。教会長になると、教会を代表しておちばに帰り、また大教会の月次祭に参拝をさせてもらうのだということを、この一言で教えていただいたように思います。

元旦祭での会長のげき

年祭の翌月、鳥栖の月次祭も無事に勤め、13日から5種類目の抗がん剤治療を受けるため入院をしました。この時に会長は毎月1人でおちばに帰らせてもらえない身体になり、「会長としての御用ができなくなったから、来年の春を目安に、会長を交替したいと思う」と教会家族に伝えました。

10月になって、薬が効き、かなり回復してきたので、携帯用の酸素ボンベを持って、会長と私の2人でおちば帰りをさせていただきました。さらに、ご本部の祭典で真柱様のお言葉聞かせていただき、会長は、この先もおちば帰りさせていただける方法を考えないといけないなど、前向きにとても

喜んだおちば帰りをされました。しかし、これが会長にとつての最後のおちば帰りでした。

その後、今後の治療について先生と相談し、放射線治療をするこ
とになりました。その治療が終わ
った12月28日、会長の希望もあつ
て退院をさせてもらい、30日には
会長の古希の誕生日を祝いました。
その時に会長から、「元旦祭は私は
勤められそうにないから、俺の代
わりに頼む」と言われました。

元旦祭は午前0時からで、23時
55分頃、献饌を終えると、会長が
奥さんに脇を抱えられ、おつとめ
衣を着られず、教服の姿で2階に



上がってきました。参拝場に入る
や否や、会長は「セッティングが
違うやろう!」と急に怒鳴り、参
拝場の後ろの椅子の下に引いてあ
るじゅうたんを直し始めました。

おつとめに起きられないほどに
身体が辛いはずで、脇を抱えられ
て上がってきたのに、普段声
を荒げない会長が怒鳴ったので、
信者さん方も何が起こったのかと
驚いていました。一緒にじゅうた
んを直していると、会長が僕の方
を向き、「もう元旦祭の時間やる。
神様も待ってるぞ」と、また声を
荒げました。私も驚きながら「は
い」と返事をして参拝に來られた
皆さんの前で、新年の挨拶をして
元旦祭を始めました。

会長は座りづとめの地方、私は
てをどりの芯を勤めました。その
最中にも、信者さん方の前で会長
から何度も注意を受け、変な汗が
止まりませんでした。

会長は前半も地方を勤め、前半
を終えると私に「もうええか。後
は頼んでおく」と言い、奥さんに
脇を抱えられながら部屋に戻りま

した。後半が始まる前、信者さん
方に、「新年最初のおつとめで、こ
んなことで申し訳ないです」と謝
ると、「これから次の会長を頼み
ます」という気迫が伝わってきた。
とても良かった」これほどの緊張
感をもつておつとめをしたのは初
めてで、とても良いおつとめにな
った」と言ってくれました。

りも前に出直されました。しかし、
しつかりと必要なことを受け継が
せていただきました。

親心のおかげで

私の申し訳ない気持ちとは反対に、
一人の役員さんが、「さあ、後半も
勇んでさせてもらおう」と皆さん
に声を掛けてくださり、とても陽
気な元旦祭になりました。

最後に信者さん一人ひとりに、
お礼とお詫びを伝えると、皆さん
が「次の会長さん、頑張ろうね」
と言って帰っていかれました。会
長は私にけきを飛ばすことで、信
者さん方が、私が次の会長だとい
うことをしっかりと心の上でも伝
えてくれたのだと思いました。

その後、会長の体力の衰えが激
しく、なんとか奉告祭まで命を繋
いでいただけるように、お願いづ
とめでお願いをしていたくださし
たが、結果的にお運びや奉告祭よ

昨年のおちば帰りで直接聞かせてい
ただいた会長は、元旦祭で私にげ
きを飛ばし、ないはずの力を私と
教会の丹精に使われました。その
おかげで、信者さん方は、鳥栖に
来て2年足らずの私を次の教会長
だと認めてくれたように感じて
います。

他にも多くのことが絡み合つて、
今、教会長として務めさせていた
だくことができています。これは
すべて親神様、教祖が先回りをし
て親心を掛けてくださったおかげ
に他ならないと、感じております。
これからの会長人生で、この御恩
をしつかりお返しできるように、
まずは教祖百四十年祭に向けて、
教祖にお喜びいただけるよう、つ
とめ励ませていただきます。

さて、先月二十六日の秋季大祭にて真柱様より親心溢るるお言葉を賜りまして、教祖百四十年祭を目指す只今の旬に改めて心の引き締まる思いをいたしております。私共を始め芦津に繋がる教会長、ようぼく一同は、これまでの歩みを顧みて、今一度教祖年祭に心を向け、実動を誓い合い、年祭活動に一手一つに心勇んで取り組ませて頂きまして、教祖にご安心頂きお喜び頂ける成人の道を、一步一步着実に直向きに進ませて頂く決心でございます。

何卒、一同が心を定めて尽くす誠実実をお受け取り下さいまして、各々の教会が旬の理に勇み立ち、教会長、ようぼくが一丸となつて、教祖百四十年祭へ勇躍前進させて頂けますよう御守護の程を、一同と共に慎んでお願い申し上げます。

十一月次祭																	祭典役割														
祭主			扨者		扨者		座りづとめ		前		後		てをどり					地方		ちやんぼん 拍子木		太鼓		すりがね		小鼓		三味線		胡弓	
大教会長			奥田眞治		山田道弘		座りづとめ		前		後		大教会長 今川政治 岩切正教 会長夫人 前会長夫人 中村美津代					湯川正圀 川畑澄博 山本義範		加世田洋 岡島秀男 井筒敏成 瀧本眞二郎 奥田正徳 守田清一		井筒ちぐさ 奥田富美子 榎理恵子		井筒ちぐさ 奥田富美子 榎理恵子		井筒ちぐさ 奥田富美子 榎理恵子		井筒ちぐさ 奥田富美子 榎理恵子		井筒ちぐさ 奥田富美子 榎理恵子	
指図方			賛者		賛者		前		前		後		竹内義忠 浜田宣郎 中村俊和 岩切孝子 山田秀子 梶川文子					西本義之 石川健郎 岡本久昭		樋川泰士 立花善三 岩切正義 木村真次 梶川和隆 河端芳雄		宗我邦代 加世田陽子 河合遊喜恵		宗我邦代 加世田陽子 河合遊喜恵		宗我邦代 加世田陽子 河合遊喜恵		宗我邦代 加世田陽子 河合遊喜恵		宗我邦代 加世田陽子 河合遊喜恵	
井筒文夫			葎内浩		梶川芳征		後		後		後		河合善洋 吉田裕樹 瀧本亘 浜田千代実 瀧本美奈 花岡由紀子					今川聖一 湯川正信 松森誠太		瀧本一太郎 宗我道明 榎康紀 新居里実 梶川和人 西本興正		湯川照代 木村理恵 梶川正美		湯川照代 木村理恵 梶川正美		湯川照代 木村理恵 梶川正美		湯川照代 木村理恵 梶川正美		湯川照代 木村理恵 梶川正美	
守田清一			伝供		竹内義忠		加世田洋		瀧本庄司		西本義之		浜田宣郎 岡本久昭 花岡忠和 新居実 西本興正 今川聖一 村田光伸 湯川正信 吉田裕樹 川畑正博 榎康紀					瀧本亘 梶川和人 望月慶太 宗我道明 森誠一 榮安文朗 田中敏行 松林英也 高馬丈典		高馬丈典		高馬丈典		高馬丈典		高馬丈典		高馬丈典			

直属巡教

本年も1月、2月に直属教会へ巡教を実施し、教祖百四十年祭へと向かう年祭活動3年目の大教会の活動方針の徹底を図る。

巡教員、巡教先は次の通り。

大教会長 〓 韮 吉野川・日方・

津和・沖縄・青木・

甲邊

井筒文夫 〓 島原・天保山・

兵庫眞洲・真明彰化・

真伯

湯川正圀 〓 尼崎・豊野・神滝本

瀧本眞二郎 〓 日高・大冠

岩切正教 〓 始良・本氣

川畑澄博 〓 稗島・紀周

奥田眞治 〓 四ツ山・神の島・

本明勇

竹内義忠 〓 芦浪・入江・和鎮

山本義範 〓 門司・芦ノ郷・

芦明照

山田道弘 〓 東津・芦東・

芦明德

加世田洋 〓 當別・芦華・明道

岩切正義 〓 本津・大島・勝明

瀧本庄司 〓 直轄・島下・天津

委員部長講習会を開催

婦人会

11月24日、婦人会芦津支部（井筒年子支部長）は、6年ぶりとなる委員部長講習会を大教会で開催した。講師に本部員・中山慶純先生を迎え、来年の仕上げの年に開催される総会に向け、参集した270名は心を揃えた。

午前10時、礼拝に続いて大教会長が挨拶。「来年はおちばに真実を尽くし伏せ込む年。各教会が1名以上の修養科生を御守護頂けるよう一生懸命に通らせていただく」と心を定め、悔いなく年祭の日を嬉しい心で迎えられるよう、共々に努めさせていただこう」と話された。

次に、中山先生が登壇され、婦人会活動方針の「育つ努力、育てる丹精」を推し進めるためにどう通るべきかをご教示くださった。

続いて、班に分かれてのねりあいは、各班とも勇んだ声が聞かれ、その後、前年度からの会務報告が行われた。

支部長は挨拶で、「道の婦人にお



掛けくださいます真柱様のお心をしっかりと聞かせていただくことが年祭活動の仕上げに欠かせないこととであり、そこに一人ひとりの育つ努力、心の成人がある。4月は真柱様のご期待にお応えさせていただけるように声を掛け合って、おちばに一人でも多くの方をお誘いし、お帰りいただきたい」と、促された。

最後に、新委員部長の紹介があり閉会。その後、食堂で会食を行い、クイズなどで楽しいひと時を過ごし散会した。

あしつファミリーひのきしん

育成部

11月30日、育成部（山田道弘部長）は、大教会で「あしつファミリーひのきしん」を実施。大教会の年祭活動の方針にある「ひのきしんと伏せ込み」に、家族で大教会に伏せ込み、句の理づくりをさせていただこうと大人13名、子供20名が参加した。

午前10時30分、神殿で参拝後、信者会館4階の内外の窓拭き、廊下の清掃を行い、賑やかな雰囲気の中で、大勢の少年会員が家族と共にひのきしんに汗を流した。





ファミリーおつとめの集い

大島分教会

12月1日、大島分教会（加世田洋会長）はファミリーおつとめの集いを開催し、83名が参加した。

参拝の後、加世田洋会長がおつとめで大切なことについて話され、続いて座りづとめ、よろづよ八首を全員で勤め、大教会長からのメッセージが読み上げられた。

その後、門出生に記念品が渡され、皆で記念撮影をし、婦人会手作りお弁当とお楽し

み行事で楽しく過ごした。

このファミリーの集いは、

大島分教会の他にも15カ所の部内教会や布教所、講社で開催。11月23日には、大教会でも開催し、月次祭後、関西在住者を中心に42名が参加した。

教務部報

教会長資格検定合格

井内 豊明（徳 修）

立教187年11月16日教会長資格検定講習会第146回を修了し、翌17日検定合格されました。

教人登録

八木 淳成（東大屋）

谷上 由樹（眞 一）

立教187年10月25日

修養科第99期修了

湯川 民世（直 轄）

林 アリセ（山城谷）

林 理美（山城谷）

岡部 順子（紀 内）

立教187年11月27日

おさづけの理拝戴《10月》

陳黄 金釵（眞明彰化）

初席《10月》

〈20名 眞明新營

〈3名 大関門

〈2名 海南、吉野川、

鳥栖、芦大熊、

紀周

〈1名 海部川、毛見、

稗島、芦姫、

本津、芦金久、

眞明徳、眞明彰化

〈順序運びより 41名〉

眞明組

おやさと 伏せ込み ひのきしん

●合同活動日●

5月25日 13:00～ 豊田山墓地集合

5月26日 祭典終了後～ 西支所前集合

10月26日 祭典終了後～ 西支所前集合

芦津大教会 笠岡大教会 西宮大教会
池田大教会 双名島大教会 玉島大教会

月例統計（自令和6年1月1日～至令和6年10月31日）

項 目 名 称 () 内教会数	初 席	の お 理 さ づ け	修 養 科 修 了	教 人
大 教 会 (1)	9	7		
東 津 (13)	8	1		1
吉 野 川 (29)	8	2		
島 原 (16)	10	2		1
日 方 (15)	18	3		2
稗 島 (7)	12	4	1	
本 津 (2)	7	1		
日 高 (2)	2	1		
始 良 (5)				
津 和 (12)	1			
門 司 (6)	3	3		
當 別 (6)	8			
大 島 (26)	2			1
沖 縄 (3)	23	8		2
尼 崎 (2)	2			
四 ツ 山 (5)	1		1	1
大 冠 (2)	2	3		
島 下 山 (1)				
天 保 山 (3)				
青 木 (1)				
芦 浪 (1)	4			
甲 邊 (1)	1			
芦 華 (1)				
天 津 (1)				
入 江 (1)				
豊 野 (1)				
紀 周 (3)	12			
勝 明 (1)				
神 の 島 (1)		1		
兵庫眞洲 (1)	2			
芦 ノ 郷 (2)	2			
本 明 勇 (2)	1	1		
明 道 (1)	4			
芦 東 (1)				
和 鎮 (3)	3			
神 滝 本 (1)				
芦 明 徳 (1)	1			
眞明彰化 (2)	33	4		1
本 氣 (2)				
芦 明 照 (1)				
眞 伯 (1)				
合 計 (209)	179	41	2	9